

## いいもの食いたい楽したい

語り手 山田 理恵

とんとん昔あるところに、ちょうど年のころが八才の男の子がおったと。

この男の子には困った癖が一つあって、それは何でもかんでも人のものをほしがるっていう癖があったんだと。

ある時この男の子が村に出て

「いいもの食いたい楽したい」って歌いながら歩いちゃったら道の向こう側から体の大きな男がやってきて、

「こら、そこの坊主、お前今いいもの食いたい楽したいっていいながら歩いちゃったけどお前そぎゃんこと本当にそう思っちょうかや」って聞いたんだと。

男の子はねえ本当にそう思っちょうもんけん

「本当だよ、いいもん食って楽ばっかりしちよったらこげないいいことないがねえ。」っていったんだと。

するとこの大きな男はねえ、

「そげかあ。それだったらこのおじちゃんについてこらんか。ついてくると、毎日おいしいもんばっかり食べさせて楽ばっかりさせちゃあで」って言うもんだけんうれしくなっついていくことにしたんだとね。

するとねえどンドン山の中につれていかれて、あたりがすっかり暗くなったころ、今までだまってあるいちゃった男が、急に振り向いて、

「坊主、やっとなつたぞ」って言ってから、細くて、長いくらい廊下をずっと行ったはしこの部屋の前まできたら、扉を開けて男の子の背中をぽんと押すと、部屋に鍵をかけて又どこかに行ってしまったと。

男の子はおぞくて、

「こんなことになるんだったらやっぱりおかあちゃんのいうことを聞いて知らん人にはついてきたらいけんだったな」って思ったけど、鍵がかかってでられなかったと。

それからだいぶたってから、あの大きな男が今度は、両手いっぱいに見たこともないご馳走を持ってきて、

「坊主、これからおじさんが毎日ご馳走を持ってきてやるから、いっぱい食べて、早こと大きくなれよ」って言ってまた扉に鍵をかけて行ってしまいうんだって。

男の子はねえ今まで見たこともないごちそうだったもんでうれしくて、おなかいっぱい食べたんだと。

するとねえ、次の日も次の日もご馳走がくるんだと。

男の子はねえうれしくて腹いっぱい食べておったら、体がだんだん太って行って座るのも大変になって来たなと思っておった。

ある晩一番奥の畳が一枚だけ浮かび上がると、中から、髪の高い青い顔をした女の人が現れて、

「坊やあんたもいいもの食いたい楽したいっておもっちゃったでしょう、私もそう思っておったら、あの男に出会ってここにつれてこられたのよ。それからというものは、毎日毎日ご馳走ばかり食べさせてもらって寝返りができないくらいに太っていったときあの男

が、私の部屋に入ってきて私の体から油を絞っていくようになったの。あんたもそうなる前に早いことここからお逃げなさいねえ」っていうと又たたみの中に消えてしまったんだと。

男の子はねえ怖かったけど、今女の人が消えた畳の中なら逃げられるかもしれんって、畳をめくってみたんだって。

それで、縁の下をつたって逃げようと畳をめくると、そこには人間の骨がいっぱいあったんだって。

でもねえそこをつたわらんと逃げられんもんで、勇気を振り絞って飛び降りて逃げたんだと。それでやっと山道に出てこれでやっと助かった。って思っておったら、後ろの方から、

「坊主、待ておまえの体の油まだ絞ってないぞ」ってさっきの男が追いかけてくるんだと。

男の子はねえもう怖くて一生懸命逃げたんだと。

そうしたらねえ森の向こうの方に明かりが一つ見えたんだと。そこに急いで行って、「助けてください」って扉をたたいたら、中から優しい顔をしたおじいさんが出てきて、「おまえ顔色が真っ青だがなあ。はやことかこまっちゃあけんあがれあがれ。」ってあがらしてもらうけど、隠れるところがどこにもないんだと。こりゃあいけんわって、天井を見たら、そこには白い米袋がかかっちゃったと。そいで、男の子を、その袋の中に詰め込んで、またのところにつるしたんだと。

すると、ちょうどそこにあの男が入ってきて、

「ここに今男の子が入ってきたのだが、隠すとお前の命もないぞ」って腰の刀を抜いているんなどころを調べたんだと。でもどこにもいないもんで帰ろうとしたところが、天井にぶら下げてあったこめぶくろが、男の子がこわくて中でふるえちゃったもんだけん、ゆさゆさ揺れだしたんだと。それをみつけたもんだから、よくも隠したな。って袋を刀をまた抜いて切ったんだと。

そうしたら、お米といっしょに男の子がどすんと落ちてきて、男の子を、刀で切ったんだと。そうしたら、男の子は、

「痛いよ助けて」って言って目が覚めたんだと。

夢だったって言う話。

子どもの頃、祖母の川上 静子（明治33年生・松江市北堀町在住）から聞いて覚えたもの